

# GLA 随想 1 幻の十年ヴィジョン

GLA を憂う元会員

2013 年 3 月 30 日 第 1 版

## 目次

1	はじめに	1
2	幻の十年ヴィジョンの経緯	3
3	経緯に対する考察	7

# 1 はじめに

多くの GLA 会員の皆様は、「GLA 共同体において高橋佳子先生は絶対的なご存在であり、GLA 共同体は先生のご指示に従って動いている」という認識を持っておられるのではないのでしょうか。かつては私もそうでした。しかし、それは大変な誤りであり、「先生が下さったご指示のうち重要なものが無視され、あるいは放置されていることにより、GLA 共同体には様々な困の現実が生じている」と認識することが正しいのではないかと考え直しました。このレポートをご一読下されば、GLA 会員の皆様の多くは、この認識に賛同して下さるものと思います。

次に、このレポートを公開するまでの経緯についてご説明させていただきます。私がかつて GLA に在籍しておりましたとき、GLA の現状について様々な問題意識を持ちました。そこで、会員同志の皆様のご協力を得て道を見出してゆくために、「インターネットを介して私の考えを発表したい」と思うようになりました。しかし、実際にそのような行動を取りますと、もしかすると GLA に対してご迷惑になる場合があるかもしれないとも思われました。そこで、私は、発表予定のホームページ草案を総合本部のご担当者へ提出させて頂き、ご意見をお伺いすることにしました。

しばらくすると、ご担当者からお返事を頂きました。このお返事は「GLA 総合本部理事長関芳郎の命により…ホームページ草案をインターネット上で発信することはやめるよう指示します」というものでした。その理由は、「GLA 総合本部の方針に托身して研鑽奉仕されている会員の皆様に無用の混乱を招き、ご心配をかけることになる」ということでした。また、「この指示は、内容を再検討して頂きたいという意味ではなく、このホームページの発信自体を今後ともやめるよう指示するものです」との一文もありました。

私は、多少の修正や削除は受け入れるつもりでおりましたが、内容の再検討の余地が認められず情報発信自体が禁止されることは、なかなか受け入れることができませんでした。しかし、「受け入れることができない」ということは、「GLA 総合本部のご指示に従えない」ということであり、「GLA を退会せざるを得ない」ということになってしまいます。様々迷うこともありましたが、

2012 年、私は所属本部に退会届を提出し、自ら GLA を退会させて頂くことにしました。

GLA を退会させて頂いた以上、私が GLA に関する意見を発表することは、法律に反しない限り私の自由になったわけですが、「自由」というものは「責任」が伴うものであり、一つ一つの記事について、「本当に発表する必要があるのか」「本当に発表しても差し支えないのか」ということを自分自身が判断しなければならなくなりました。この判断を一度に下すのは、なかなか難しいことではないかとも思いました。

そこで、私は、発表しようと考えていたことを一度に発表してしまうのではなく、「発表する必要性が高いと思われるもの」「発表しても差し支えが無いと思われるもの」を優先しつつ、各テーマについて順番に発表してゆくことにしました。一つのテーマについて発表をした後、私は「さらに他のテーマについて発表をする必要があるのか否か」を神に尋ね、促しを感じた場合には、次のテーマについて考えを発表させて頂きたいと思いました。

このレポートのタイトルの先頭は「GLA 随想 1」としましたが、「1」の次に「2」「3」…があるのかどうか、現時点では私にも解りません。神からの促しを感じた場合には、「2」「3」…のレポートが続きますが、促しを感じなかった場合には、今回のレポートで終わりになります。

## 2 幻の十年ヴィジョンの経緯

「幻の十年ヴィジョン」とは、2000 年八ヶ岳伝道者研鑽セミナーで分かち合われた「お世話構造の十年ヴィジョン」のことです。これは、「新千年紀の始まりの十年が決定的に大切な時」「共同体として十年法則を生きる」というスローガンとともに華々しくスタートしましたが、十年以上経過した今になって振り返ってみますと、何も成果が上がっておらず、そのまま放置されているように見受けられます。なぜ、このようなことになってしまったのか、これまでの経緯を GLA 誌から読み取れる範囲で振り返ってみたいと思います。

### 2.1 2000 年 八ヶ岳伝道者研鑽セミナー

GLA 誌 2000 年 11 月号の 44～53 ページには、「GLA 魂共同体 千年構想 2 我ら千年の礎とならん」というタイトルにて、同年 9 月 10 日に八ヶ岳伝道者研鑽セミナーで分かち合われたヴィジョンが掲載されています。特に「伝道とお世話構造の十年ヴィジョン」として、48 ページには次のような記事がありました。

関本部長は、「この十年間に会員の人数が増加するという前提で、このお世話する仕組みを整えてゆかなければならない」と語られ、「お世話の現場にいらっしゃる皆さんのお声もぜひ聞かせて下さい。共に青写真にアクセスして二十一世紀のお世話構造と一緒に整備してゆきましょう」と呼びかけて下さいました。

この記事から、「お世話の現場にいらっしゃる皆様と響働して、二十一世紀のお世話構造の青写真にアクセスすること」というご指示を高橋佳子先生から頂いたものと考えられます。なお、先生は「ご指示」をされたわけではなく、「ご提案」をされたのかもしれませんが、「ご指示」であろうと「ご提案」であろうと、それは必要であるからされたものであり、両者を区別して考える必要は無いものと思われます。

また、同号の 46～47 ページによると、伝道者研鑽セミナーでは、「千年構想のいのちをさらに魂に刻む」ことや、「新千年紀の始まりの十年が決定的に大切な時」であること、「共同体として十年法則を生きる」ことなどが分かち合われたということです。「お世話構造の十年ヴィジョン」も、当然、その一環であったはずです。

## 2.2 2001 年 フロンティアカレッジセミナー

GLA 誌 2001 年 4 月号 42～49 ページには、同年 2 月に開催された FCS（フロンティアカレッジセミナー）の内容が掲載されています。特に 47 ページには、「響働力・グループ力の鍛錬」について、次のような記事が掲載されています。

「共に集う同志が絆を深め、一人ひとりが抱く『困』を『願』へと運ぶ智慧を出し合い、一緒に道をつけてゆけるような力を育んでほしい」という先生のお心から、セミナー三日間を通じて「響働力・グループ力」の鍛錬に取り組むこととなった。全体研修、班別研修、部屋別研修とも、地域別に班分けされたグループで行動を共にしつつ、学びを深めてゆかれた。特に一日の終わりに各部屋では、一日目に取り組んだシートを介在として、深い出会いの時間が持たれていった。

この記事から、遅くとも 2001 年 1 月頃には、「響働力・グループ力を育むことの大切さ」と、「2001 年の FCS をその鍛錬の場とすること」が先生から明かされたものと考えられます。

## 2.3 2001 年 善友の集い

GLA 誌 2001 年 6 月号には、同年の善友の集いの前半プログラムにおける分かち合いの抄録が掲載されており、60 ページには、「ヴィジョン②：共同体の変革二——グループ力」という節があります。この節によりますと、関本部長から次のようなご発言がありました。

『GLA の活動はこの二〇〇一年を契機に、これまで以上に厚みを増し

てゆきます。例えば、ターミナルには、「研鑽・奉仕、お世話、伝道」という三つのはたらきのいのちがありますが、それらが一層活発になるようにお世話構造をつくってまいります。とりわけ、「お世話する側」と「お世話される側」という分かり方を持った二十世紀のパラダイムから、転換を果たしてゆかなければなりません。三つのアジェンダを生きるために、互いに手を取り合い、絆を結んでゆくのが、二十一世紀のお世話構造（の要）、グループ力・響働力です。…』

この記事から、遅くとも 2001 年 3 月頃には、「グループ力・響働力が二十一世紀のお世話構造の要である」ことが先生から明かされたものと考えられます。

## 2.4 2002 年～2004 年

2002 年以降、「グループ力・響働力に基づくお世話構造の整備」についてどのような取り組みが行なわれたのかは存じませんが、少なくとも「一般会員が認識できる事」という範囲では、取り組みの形跡が見当たりません。おそらく何の取り組みも無いまま放置されていたのではないかと推測されます。

## 2.5 2005 年 「千年構想」の後智慧

GLA 誌 2005 年 1 月号の 60～62 ページには、「魂共同体千年構想のための第二期集中布施行のご報告」という記事が掲載されており、特に 62 ページには、「今後に向けて」として次のような記事が掲載されています。

その歩みを確かにするために、「千年構想第二期」を予定通り二〇〇四年十二月末日をもっていったん環に結び、しばらく後智慧（振り返り）の期間を頂いた上で、「千年構想」に向かう志も新たに再スタートしたいと願っております。この五年を振り返りますと、上記でも触れたような様々な果報を頂きましたが、一方で、会員の皆様に満ちている志の内圧に比して、まだまだ十全に形に結ぶことができなかったことを悔いとして刻んでおります。皆様のご意見もお伺いしながら、後智慧と

ともに、ぜひとも次なるヴィジョンを描いてゆきたいと思います。

この記事から、2004 年末頃に、「過去五年間の千年構想の歩みを後智慧するように」とのご指示を先生から頂いたのではないかと考えられます。それは、一つには、「忘れて放置しているテーマを思い出せるように」というご配慮も含まれていたのではないかと思います。

しかし、残念ながら「グループ力・響働力に基づくお世話構造の整備」については、思い出せなかったように見受けられます。あるいは、思い出せたにもかかわらず、あえて「無視した」ということなのかもしれません。

## 2.6 2008 年 GLA 創立 40 周年記念プロジェクト

2008 年には「GLA 創立 40 周年記念プロジェクト」が発足しました。「7 つのプログラム」の中に「人生同伴態勢の充実」というプログラムがありました。その内容を検討する機会を頂いたということは、「グループ力・響働力に基づくお世話構造の整備」というテーマを思い出せるチャンスを頂いたということでもあったと思います。しかし、残念ながら、この時点でもこのテーマを思い出すこともできず、このテーマはそのまま放置され続けたように見受けられます。

このように、お世話構造については、何の進捗も成果も無いままに「十年」の期間が経過しました。



### 3 経緯に対する考察

#### 3.1 全般的所見

以上の経緯を振り返りますと、「新千年紀の始まりの十年が決定的に大切な時」「共同体として十年法則を生きる」という当初の宣言が空しく響いてきます。

「グループ力・響働力に基づくお世話構造」が「二十一世紀のお世話構造」であるということは、「高橋佳子先生がご帰天された後のお世話構造」であるということにもなります。現在では、会員の皆様のお世話に関して高橋佳子先生が最終的な責任を担って下さっていますが、先生がご帰天された後は、このお世話構造が先生に代わって、最終的なお世話の責任を担うことになります。

しかし、先生に代われるだけのお世話構造が十年程度の期間で整備できるとは思えません。新千年紀の最初の十年で整備することが予定されていたお世話構造は、「グループ力・響働力に基づくお世話構造」として基礎的なものであって、その後は段階的に水準を上げてゆくことによって、やがて先生に代われるだけのお世話構造を整備してゆくことが予定されていたのではないのでしょうか。基礎を築くはずであった最初の十年が失われてしまったことは大きな損失であったと考えざるを得ません。

申し上げるまでもないことですが、先生が下さったご指示は必要であるからこそ下さったものであり、弟子の判断で勝手に無視したり放置したりして良いはずがありません。ただ、十年以上に渡ってご指示が放置された経緯を考えますと、先生は「指示した事を遂行するように」との明示的な催促はされなかったのではないかと考えられます。「先生はなぜ催促をされなかったのか」という点に疑問を持つ人がおられるかもしれませんので、私の考えを説明させて頂きたいと思います。

まず、「催促されなければご指示の通り動けない」ということは、「ご指示に共感できない」ということではないのでしょうか。それは、「このようなご指示はおかしい」と反発しているわけではなく、「面倒だから、できればやりたくない」「何をすれば良いのか、もっと具体的に指示して頂きたい」などと、な

んとなく思っていたのではないかということです。

次に、ご指示に共感できない人に対して先生が催促されると、何が起こったかを考えてみたいと思います。先生から催促を受けますと、「お世話構造の青写真にアクセスする」というご指示を遂行せざるを得なくなります。それは、具体的には、お世話構造の仮説を立て、「先智慧・実行・後智慧」のサイクルを回してゆくということであり、その過程では、お世話の現場を担っておられる方々に対して、様々な指示を発信してゆくということになります。

お世話の現場には、実際に困の現実を抱えた会員さんがおられ、お世話グループの皆様は共に道を見出してゆくことを願いとして関わっておられるわけです。その場に対して、先生のご指示に共感できない人、「できればやりたくない」と思っている人が指示を発信すると、痛みと混乱の現実が生じることになるでしょう。

従って、先生が催促をされなかったのは、「弟子が自らの心を先生の御心に合わせ、自らの願いに基づいてご指示を遂行する時を待たれていた」ということではないかと考えます。

GLA 総合本部においては、何よりもこの「二十一世紀のお世話構造の青写真にアクセスする」というご指示が放置されたという事実を直視して頂き、なぜそのようなことが起こったのか、十分な後智慧をして頂く必要があるのではないのでしょうか。ご指示が放置された経緯について、私自身が GLA 誌から読み取れた範囲のことは上述させて頂きましたが、これでは内容が不十分であると思います。GLA 総合本部には、より詳細な経緯を調査して頂くとともに、その調査結果および後智慧を全会員に対して公表して頂くことが必要ではないかと思われます。

その後智慧が終了した後にお世話構造の変革に再挑戦を果たして頂きたいと思いますが、その際に GLA 総合本部に対して、また会員の皆様に対して、ぜひ果たして頂きたいことを以下に述べさせて頂きます。

### 3.2 高橋佳子先生の御旨を我が旨とすること

高橋佳子先生が職員の皆様に指示された内容のうち、GLA 誌等を介して会員に発表される内容は、ごく一部に過ぎません。「二十一世紀のお世話構造の

青写真にアクセスする」という全会員に発表された重要なご指示が放置されたということは、他にも放置されているご指示が様々な存在するのではないかと推測されます。

繰り返しになりますが、先生が下さったご指示は必要であるからこそ下さったものであり、弟子の判断で無視したり放置したりして良いはずがありません。過去に下さったご指示のうち放置されているものを調査して頂くとともに、実現に向けて計画を立てて頂く必要性を感じます。

ここで、「ご指示が放置されている」ということは、「先生が催促されなかった」ということではないでしょうか。それは、お世話構造に係るご指示と同様に、ご指示に共感できない人を催促して動かしたとしても、痛みや混乱が生じるばかりで何も進まないからではないかと思われまます。

そうしますと、ご指示に共感できない状態でご指示を遂行しようとしても、同じような結果しか生まれないのではないかと予測されます。ご指示を遂行してゆくにあたっては、ご指示に共感できる心を育むこと、すなわち「自分自身の心を高橋佳子先生の御心に合わせてゆく」こと、「先生の御旨を我が旨とする」ことが何よりも大切ではないでしょうか。

### 3.3 ご指示を実現する手順に留意して頂くこと

高橋佳子先生から頂いた様々なご指示を実行に移す場合に、その「手順」について留意すべき場合があるものと思われまます。

例えば、GLA 創立四十周年記念プロジェクトの「7つのプログラム」には「人生同伴態勢の充実」というプログラムがあり、「神理を学ぶ専門家とも響働し、会員の皆様の解決困難な問題にも道をつけてゆく（トータルライフ・パートナーズシステム）」という挑戦の内容が発表されていました。この挑戦の内容は、先生からご指示を頂いたものであると考えまます。

ここで、「神理を学ぶ専門家とも響働し」という部分は、「専門家以外の方々が響働するとともに、その専門家以外の方々が専門家とも響働する」という意味ではないでしょうか。そして、「専門家以外の方々」とは、「グループ力・響働力に基づくお世話構造」のグループメンバーの方々であると考えられます。

そうしますと、2000年、2001年に頂いたご指示に基づいて、「グループ力・

響働力に基づくお世話構造」を実現することが先決問題であり、2008年に頂いたご指示に基づいて「トータルライフ・パートナーズシステム」を実現することは、そのお世話構造を基礎として果たされてゆくべき事ではないでしょうか。従って、前者を放置して後者のみを実現しようとすると、何も進まなくなります。

ところで、「人生同伴態勢の充実」に限らず、「7つのプログラム」については、高橋佳子先生が直接的に指示されたことを除いて、ほとんど何も進捗していないように見受けられます。その直接的な原因は、方針案の検討に関わっておられる方々が「青写真にアクセスする力を充分に育てられない」という点にあるのではないのでしょうか。

ただ、「青写真にアクセスする力を育む」ということは、なかなか時間がかかることですので、「7つのプログラム」を進捗させてゆくためには、「はたらきの布陣」を整えること、すなわち「既に青写真にアクセスする力を育てている人を配置に就ける」という方向性が正しいのではないのでしょうか。

そうしますと、先生が「7つのプログラム」を開示される以前、つまり2007年かそれ以前に、「はたらきの布陣を整えるように」とのご指示があったのではないかと推測されます。そして、このご指示も、やはり放置されているのではないのでしょうか。もし、その通りであるとする、この「はたらきの布陣」を整えることが先決問題であり、「7つのプログラム」はその後に遂行することが正しいのではないかと考えられます。

この「はたらきの布陣」とは具体的にどのようなものであったのか、過去のGLA誌からは発見することができませんでした。例えば、「在家の会員の中から青写真にアクセスする力を既に育てている人を選抜して諮問機関を組織し、この諮問機関が意志決定機構を補佐する」ということが一つの可能性として考えられます。

### 3.4 事態を自らに引き寄せる

高橋佳子先生から頂いたご指示が放置されたという問題は、直接的にはGLA共同体の中の一部の方々の煩惱によって引き起こされたことのように見受けられます。

しかし、私は、GLA 会員のお一人お一人が「事態を自らに引き寄せる」ということが呼びかけられているのではないかと思います。お一人お一人の中に、「無関心」や「依存心」のようなものは無かったでしょうか。もし有ったとすると、「その無関心や依存心がこの事態を引き起こしたのだ」と考えることはできないでしょうか。

また、直接的に問題を引き起こした煩惱は、「自分自身の煩惱ではなく、他人の煩惱である」という自他を切り離れたまなざしを私たちは持ちやすいのではないかと思います。しかし、御著書「グランドチャレンジ」に登場した雨乞い師のように、人間は「他人の煩惱を自らのものとして引き寄せて浄化する」ということも果たせる存在ではないでしょうか。

これは、なかなか難しいテーマかもしれませんが、今後 GLA 共同体が世界の困に向かってゆくということは、「自分が全く関わっていないところで発生した困の次元を、自分自身に引き寄せる」ということになると思います。もし、同じ GLA の同志が GLA 共同体の中で引き起こした問題を引き寄せることができないとするならば、世界の困に向かってゆくことは望めないのではないのでしょうか。「人間の諸相」の中に次の一節がありました。

人間は未完の存在である  
無知に生き 未熟と矛盾を抱いている  
しかし同時に それは成りゆくものである  
成りつつあるものである  
理に生きるものとなり 環境としての響き合いに心を懸ける  
自他の境を溶かし なりゆく智慧の生ずるとき  
同苦同哀の存在として人は生きる

私たちが、今回の問題を自らのものとして引き寄せることができたとき、問題を直接的に引き起こされた方に対して、「同苦同哀」のまなざしを持つことができるのではないのでしょうか。そして、その方の立場が今後どのように変わろうとも、その方が魂の成長を果たしてゆかれるにあたって良き縁としての働きを、私たちは今後とも果たすことができるのではないのでしょうか。

以上